

親鸞さまの

【本文】

ほんがんぎわく ぎょうじや
本願疑惑の行者には

がんけみしゅつ
含花未出のひともあり

わくしょうへんじ
或生辺地ときらひつつ

わくだくたい
或墮宮胎とすてらるる

【意識】

阿弥陀様の御心を抛り所とせず、
自分様を抛り所にする人は、

蓮華の花の中に包まれて出られな
い人であり、

極楽浄土とは外れた ところ 処 ところ に往くとも、

たと 喩えて母胎の中にとどまるよう
なものだとも、善導大師はご指摘
になられています。(だからこそ、
阿弥陀様を抛り所にさせていただ
きましよう)

【私の味わい】

ざんろ 「柘榴」(山本周五郎著)には、受け容れることができなかつた、かつての良人 おつと に対す

る後悔とその半生がつづらられています。嫁ぎ先の武家の当主であり、良人の昌 しょうぞう 蔵に

まさ 真沙は馴染むことが出来ず、遂には嫌悪感を抱くまでになります。真沙は厳しい しつけ 躰

の中で育ってきた為、昌蔵の親密で独特な愛情表現を武士にあるまじき姿と捉えてい

たからです。良人はその妻の様子に困惑し、物を頻繁に買ってくることで補おうとし

ますが、遂には藩の公金に手を出すに至って夫婦生活は破綻します。連座で罰せられ

かねない状況に陥りますが、周囲のとりなしがあり、真沙は江戸の大奥勤めに転身し

て新生活を始めることとなります。当初は、良人の束縛から自由になったと喜んでいま

したが、年令を重ね、様々な夫婦に出会う事で真沙の考えは徐々に変わっていきま

す。そもそも他と比べる必要のない それぞれ 其々に特徴的なものであり、互いの欠点と共に

受け容れ合う事に夫婦の意味があると気が付き、後悔の日々を送るというお話です。

自分の育ってきた常識、考えの中だけで判断していくと、当然の帰結として自分だけ

の世界がその行く末になつてしまふ、ということをお話とも受け取れます。

阿弥陀様のお心、お考えを抛り所にすれば極楽という世界がその行く末になる。

自分の心、考えを抛り所にすれば、極楽とは違う世界がその行く末になる。
至つて明瞭なこの事実を、親鸞聖人は前後のご和讃で繰り返し、繰り返しお示し下
さつています。阿弥陀様のお心に触れる、法話を聞く必要性がここにあります(悠水)